

「なぜ」が問われる時代へ？

コロナ禍の影響で困窮する学生に現金給付する支援策が先日、発表された。

この際、留学生への給付は日本人学生と異なり、成績上位三割程度に限定される規定があり、差別ではないかとネットを中心に批判の声が表れた。文部科学省HPには「三割のみを対象とするものではない」とあるが、成績要件は留学生にだけ存在するので、批判はあながち間違いではない。

私が特に気になったのは文科省の説明だ。本紙二十一日の記事によれば「日本に将来貢献するような有為な人材に限る要件を定めた」とある。素朴に問う。「将来貢献」「有為な人材」は、どのように把握できるのか。「成績」で測れるものなのか。

二〇〇二年にノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊先生が、ことあるごとに「物理学科ではじりだった」と発言していたの思い出す。謙遜もあるだろう。だが先生が伝えたいのは、人が将来、何を為すかは誰にも分からない、その意外性だろう。

さらに私の疑問は続く。「貢献」「有為」は「誰にとって」のものか。「日本」では抽象的すぎないか。またそもそも成績は個を評価するものだから、日本への貢献とは、まずは関係ないのではないか。先の説明は、よく考えると意外に曖昧なのだ。

私は前回の本コラムで「九月入学」の議論を支えるグローバル化が疑問だと呈した。これも同じことだ。九月に合わせることでグローバル化なのか。中国からの留学生に聞くと、留学はシーズンより、手続き、受け入れ態勢、費用等が大きな課題だったという。その留学生によれば、むしろ日本の四月入学は桜の咲く良い季節で、留学先に選んだ日本の文化に触れた瞬間だったそうだ。互いの文化の違いを知り、理解を深めること、これがグローバル化の本義ではないのか。

思うに、コロナ禍の中で私たちは、何かを為すことに対して、「なぜ？」と問う術を深め、鍛えたのではないか。例えば、政治への関心の高まりもその一つだ。アフターコロナの中で、この意識は続いていくだろうか。

(静岡文化芸術大学教授)